

## 対馬市上県町

6

# 田ノ浜・樫滝間予約制 ミニバス運行協議会

人口 856人

世帯数 426世帯

設立 平成28年8月

(令和3年11月末現在)

### 地域の現状と課題

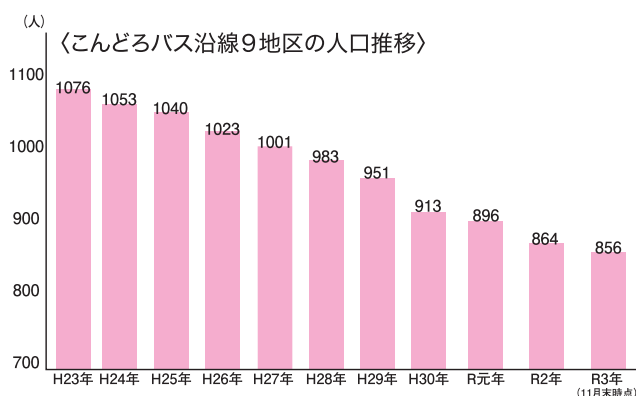
対馬市は、博多港から海路138キロ、韓国の釜山まで49.5キロに位置する国境離島です。南北82キロ、東西18キロと細長く、1次産業や観光業が主な産業となっています。国の天然記念物ツシマヤマネコや、大陸系の動植物が生息し、朝鮮半島との長い交流の歴史を物語る江戸時代の外交資料「朝鮮通信使に関する記録」はユネスコの世界記憶遺産に登録されています。

現在の対馬市は厳原、美津島、豊玉、峰、上県、上対馬の6町が平成16年に合併し誕生しました。令和3年11月末時点の人口は2万8878人と、10年前の平成23年から約6千人(17%)減っています。

市内の主な公共交通機関は民間事業社が運行する路線バスです。運転免許のない高齢者たちにとって、バスは通院や買い物といった生活の足として欠かせませんが、路線バスだけでカバーするには限界があります。

こうした中、平成28年11月に対馬市北西部の上県町内で、市内初のコミュニティバス「田ノ浜・樫滝間予約制ミニバス」(こんどろバス)の運行が始まりました。運行エリアは田ノ浜、志多留、伊奈、越高、御園、犬ヶ浦、越ノ坂、樫滝(仁田)、飼所の9地区です。同町は過疎化が進む農漁村地域で、令和3年11月末時点の沿線人口は856人、高齢化率は41%となっており、9地区のうち3地区が、人口の50%以上を65歳以上が占めます。

〈拡大図〉



江戸時代に朝鮮王朝が日本に送った外交使節団「朝鮮通信使」の行列を再現する日韓交流イベント＝令和元年8月、対馬市厳原町



交通空白地域で運行しているこんどろバス＝令和3年10月、対馬市上県町志多留

## 現在の主な活動内容

### 〈「こんどろバス」の取組〉

地元住民でつくる田ノ浜・樫滝間予約制ミニバス運行協議会(以下=「協議会」)は、地元で観光・教育事業に取り組む一般社団法人対馬里山繋営塾が事務局を務め、ドライバーは同団体スタッフや住民で実働8人(令和3年11月末時点)となっています。報酬は1往復1500円~2500円です。使用する車両は対馬市が10人乗りのワゴン車を、協議会に無償貸与しています。交通空白地域における「市営バスの運行委託」として「市町村運営有償運送」の形態を取っています。住民のアイデアを基に、「ゆっくり、安全に」という願いを込め、この地域で亀を意味する「こんどろ」を名称に冠しました。

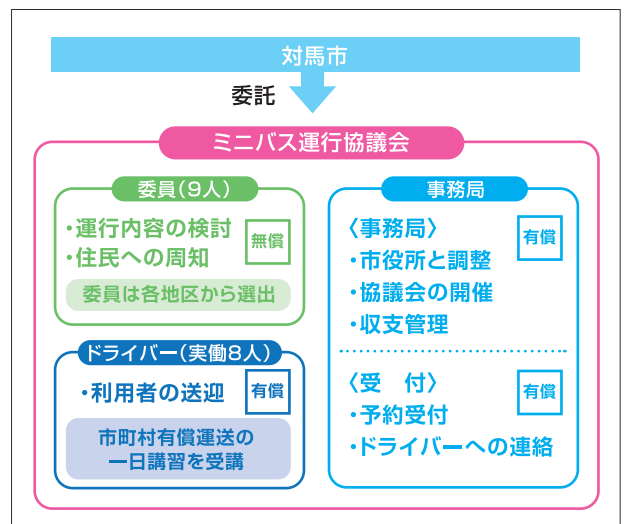
運行エリアでは民間事業者の路線バスが1日1往復通っていますが、樫滝(仁田)を通過し北部の上対馬町と南部の厳原町とを結ぶ縦貫線との接続が悪く、田ノ浜にはバス停もありません。そこで、こんどろバスは接続に配慮したダイヤで、田ノ浜-樫滝線(13.6キロ)などを1日3~4往復し、月曜限定で隣町の峰町佐賀にある商業施設「ハートランド」まで運行しています。利用前日までの予約が必要で、自宅近くで乗り降りでき、運賃は大人片道100円~520円です。

主な利用者は、沿線の診療所やハートランドに行ったり、縦貫線への接続に使ったりしてい

る高齢者です。令和2年度は計217往復を運行しており、延べ554人が利用し、1往復あたりでは2.6人と前年度の2.2人をやや上回りました。



こんどろバスの主な運行エリア



運行の体制

### 〈運営上の課題と克服手法〉

協議会の事務局の仕事は、ドライバーのシフトづくりをはじめ、予約の受け付け、配車、会計、対馬市に提出する各種報告書の作成など広範囲に及びます。運行開始前から協議会の立ち上げに尽力していた市の外部集落支援員であった女性が、運行開始後も事務局を1人で担い、平成31年からは志多留に移住した別の女性に引き継がれ、こちらも1人でこなしていました。



こんどろバスが通っている越高地区



これは誰でも簡単にできない仕事で、地域活性化への思いが強い移住者の事務局長によって支えられてきました。ある意味、綱渡りの状態だったといえます。

こうした中、令和3年3月、当時の事務局長の女性が急逝しました。協議会の会長が後任としてすぐに打診したのが、同じく志多留へ移住した若者などのスタッフ9人がいる現地の一般社団法人対馬里山繋ぎ塾でした。

この団体の代表理事も移住者で歴代の事務局長と親しかったことから事務局長を引き受けることになり、スタッフと共に切り盛りしています。事務局の人材・体制確保の大切さが浮き彫りとなりました。



こんどろバスに乗り込む利用者＝令和3年10月、対馬市上県町越高

## POINT

- ・交通空白地域を1日3～4往復
- ・診療所や商業施設の利用が中心
- ・1往復当たりの利用者は平均2～3人

## INTERVIEW

# 車確保の心配がなくなった

越高地区に住んでいて、毎月1回、伊奈診療所に通うために使っています。仲良しの友達3人でいつも一緒に乗っていて、楽しいですよ。家の近くまで車が来てくれるし、検査とかで1人だけのときでも、お願いすれば運行してもらえるのでありがたいです。

こんどろバスが運行する前は、路線バスがいい時間帯に通っていなかったの、長い間、親戚に頼んで車に乗せてもらっていました。診療



こんどろバスの利用者  
梅野エミ子さん

所はバスで10分もかからないぐらいの距離ですが、足を確保するのは大変でした。

運行当初は、こんどろバスのことをよく知らず、どこからどう出ているのかも分かりませんでした。それから2、3年ぐらいして時刻表の回覧などが家に回ってきて、試しに使ってみたのが最初でした。何より車の心配をしなくていいのが一番うれしいです。これからも走り続けてほしいです。

## 行政からの支援

対馬市は、内閣府の地方創生推進交付金を活用して使用車両を購入しました。協議会への運行委託費として毎年230万円前後を予算化しており、国土交通省の地域内フィーダー系統確保維持費国庫補助金も活用して、事務局経費や車両維持費、ドライバー講習費などを賄っています。



こんどろバスの車内

## 今後の課題・展望

民泊などの観光・教育事業を手掛ける対馬里山繋営塾は急ぎよ事務局運営を引き継ぐことになりましたが、団体の代表理事は「引き受けてよかった」と話します。こんどろバスの運営を通して、住民と交流し、地域の情報を得るとともに、新たな収入確保につながるためです。

協議会も、かつて事務局運営は1人に任せっきりでしたが、対馬里山繋営塾では、予約対応などの負担が複数のスタッフに分散されるため**事務局機能の安定化**にもつながっています。

実働ドライバー8人(令和3年11月末時点)のうち、対馬里山繋営塾のスタッフは3人です。

一般ドライバー5人の中には高齢者がおり、なり手不足も課題となっています。また、利用者は令和2年度で1往復当たり2.6人にとどまっています。利用者の掘り起こしと同時に、ドライバー確保を進めることが求められます。



協議会の事務局のスタッフ=対馬市上県町志多留、対馬里山繋営塾

## INTERVIEW

## 移住者の頑張りあってこそ

こんどろバスの立ち上げに当たっては、移住者である対馬市の外部集落支援員が「地域のために」という思いから事務局の仕事をはじめ、ドライバーの確保にも奔走してくれました。そうした頑張りに触発されて、住民も協力し合いました。地元住民だけではとてもできなかったと思います。

運行面では、利用者のニーズに合わせてダイヤを見直してきました。一方、当日予約でも乗れないか



田ノ浜・樫滝間予約制ミニバス  
運行協議会会長  
原田義則さん

という声もありますが、運転手には仕事をしている人もいて、ずっと張り付けるわけにはいかないので、前日までの予約制にしています。

私も運転手を務めています。利用者からは大変感謝されます。こんどろバスは、必要なときに利用できる住民の足として定着してきました。高齢化は進み、車を運転できなくなる人はさらに増えるでしょう。これからも続けていかなければなりません。

### まとめ

- ① 交通空白地域を1日3~4往復
- ② 診療所や商業施設の利用が中心
- ③ 1往復当たりの利用者は平均2~3人
- ④ 事務局機能の安定化
- ⑤ 移住者が新たな担い手に
- ⑥ ドライバーのなり手不足が課題

## 取材を経て

人口減少、高齢化が進むと、地域の担い手が不足しますが、この地域では**移住者がそれをカバー**する役割を果たしてきました。

前の事務局長が急逝した際も、事務局機能を複数の移住者が在籍する対馬里山繋営塾が

切れ目なく引き継ぐことができたため、バス利用者へのしわ寄せは起きませんでした。改めて事務局体制確保の大切さを認識しました。

こんどろバスの重要性は今後も高まるでしょう。ドライバーの確保を進めるとともに、まだ利用したことがない住民へのさらなる利用喚起が大切です。